

巻頭言

12周年に想う

三輪 睿太郎

日本農学アカデミー会長

日本農学アカデミーが創立されてから 12 年が過ぎた。敗戦のような強いインパクトがあると、その後 10 年という時間は大いなる感慨とともに思い出されるものだから、その頃は沢山の 10 周年行事が行われた。昭和～平成、20 世紀～21 世紀などの変化はさして感慨を伴うものでなかったせいか、このところ〇〇10周年という行事は流行らなくなった。

実際には、この 10 年、我が国の政治・経済・社会はかつてない危機に陥り、それにつれて産業としての農業、生活と一体の場である農村は老い、衰えてきたのである。農学も生態学、情報科学、健康科学、エネルギー科学へ領域を拡張、ゲノム科学から生理・病理の分子機構へと深化を見せ、社会やメディアにも種々の話題を提供するようになったが、学識を実学に高めるに至らず、国民生活や農業経営に対して大きな有効打を打ち出せないでいる。

これを「停滞」と表現すれば、私の世代こそその時代とともに歩み、農学を「停滞」に導いた責任を問われる立場にある。

本号には日本農学アカデミーに関して、設立以来の諸先輩が文を寄せられているが、私は 1998 年、農林水産技術会議在職中に学術会議第 6 部長を務めておられた志村正康先生に呼ばれて、「学界、官界、産業界が一体となって、農学の、農学のための、農学による主張をストレートに世に打ち出す運動体が必要だ」とアカデミー設立構想を話されたのを強く覚えている。

先に述べた危機に対する責任感から、力もわきまえず会長の責務を負った今でもこの志村先生の言葉こそ、農学アカデミーの使命だと思っている。

じわじわと進行した我が国の危機は本年 3 月 11 日の東日本大震災で決定的な打撃を受けた。このことは国民の意識の真中に食料・エネルギーという生活の基本的な課題を据え直した。6 月 1 日に日本農学アカデミーが（財）農学会

と共催した「消費者の不安に農学者が答える」というシンポジウムには会場に入りきれない人々が参加した。世は農学からのメッセージを待っているのだ。

学術・教育・研究開発の各分野で農学の停滞を進歩に向かわせ、国民の期待に応えるために日本農学アカデミーの役割は大切だと思う。

率直で、型にはまらない、こだわらないでくつろいだ、自由な議論で会員が各々の立場で見識を高められるようなサロン、これがアカデミーの重要な機能ではないかと思う。

双葉十三郎が黒澤明の「野良犬」を評して、「力男が真っ赤に力むような画面の連続では観客は疲れてしまう」といったが、勝ち負けを競う弁論大会よりも、くつろいだ自由討議の方が参加者に問題の本質を悟らせ、発想を豊かにするというのが私の持論である。

それが日本農学アカデミーの会員の力を発揮させ、「農学の、農学のための、農学による主張」を有効に世に打ち出す原動力になるのではないだろうか。